神奈川県考古学会
考古かながわ 第43号

神奈川の遺跡と火山灰層序学

上本　進二

火山灰層序学とは

普段見慣れているはずの関東ローム層ではあるが、遺跡で時代ごとの微妙な土の違いを見分けるのは難しい。それでも南関東の遺跡の土層は大半が富士山の火山灰によって構成されている。神奈川県をはじめとして南関東では、遺跡も火山灰層も平坦な場所にあることが多いので、遺跡と火山灰は切っても切れない関係にある。関東ローム層の地層を細かく見てみると、気泡に富む黒～赤の小石のようなスコリア質火山礫（スコリア）、白い粘土状の軽石質火山礫（パミス）、溶岩片などが混ざっている。これらは火山灰と呼ぶには無理があるので、火山から放出されて空中を飛来した破片状の固形物質の総称としてイタリア語のテフラ（Tephra:火山砕屑物）を用いることにしている。テフラの堆積層序を研究する分野が火山灰層序学（Tephrochronology:テフロクロノロジー）である。

台地に堆積するテフラ

富士山は約9～10万年前頃からテフラを放出するような爆発的噴火を開始し、南関東には偏西風によって運ばれた大量のテフラが継続して堆積するようになった。テフラは空中を飛来してくるので、火山との距離、風向き、風力によって堆積量に差ができる。また、斜面や川沿いの低地に降下したテフラはすぐに流されてしまうのでテフラ層は形成されにくい。テフラ層が最も安定して堆積している場所が台地である。関東地方は日本で最も台地の発達が良い地方なので、関東ローム層が形成される要因になっている。台地は海岸段丘かまたは河岸段丘が起源の平坦面で、海岸平野または川沿いの低地が離水して台地になった地形である。離水とは地盤隆起か海面低下によって海や川の侵食・堆積作用の影響を受けなくなることを言う。南関東で最も古い台地は約50万年前に台地になった多摩面（多摩丘陵）である。50万年分のテフラをのせているはずだが、侵食を受けて起伏に富む丘陵地になってしまったので、新しい時代のテフラは流されている。鎌倉から多摩に続く相武国境の丘陵が多摩丘陵である。次に新しい台地が下末吉面（下末吉台地）で約13万年前に離水した台地である。横浜市鶴見区下末吉で最初に調査されたので、約13万年前に離水した台地は全国的に下末吉面と呼ばれている。下末吉台地も 13 万年分のテフラをのせているはずだが、高座丘陵や座間丘陵のように丘陵地化した所もあって上部のテフラは流されていることが多い。約7万年前に離水した武蔵野面（武蔵野台地・相模野台地）は相模原市や大和市など県内に広く分布しており、約7万分のテフラをのせている。武蔵野面の台地を侵食して流れる境川や引地川の川沿いや相模川の両岸には、約3.5万年前に離水した立川面がへばりつくように分布している。神奈川県の旧石器時代の遺跡で目にするロームはこの立川ローム層である。約3.5万年前以降

に富士山から飛んできたテフラをのせている。

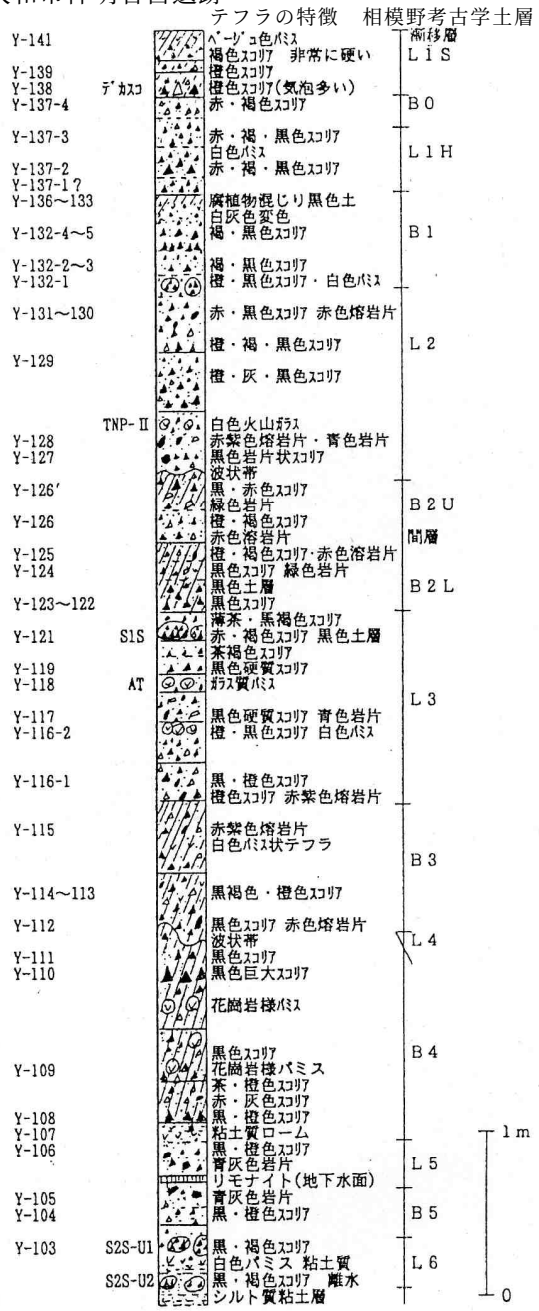
テフラと遺跡

神奈川県の遺跡で火山灰層序学的にテフラの分層が試みられたのは、1986 年の上杉陽・米澤宏氏らによる宮ヶ瀬遺跡群の調査が最初であった（米澤・上杉 1990）。中津川渓谷の河岸段丘に堆積したテフラ層の中から旧石器時代の炉址や石器が発見されたものの、テフラの状態が相模野台地と違いすぎていたので、従来の標準的な考古学土層（Ｂ０～Ｂ５の黒色帯とＬ１Ｓ～Ｌ６のローム層で分けるＢＬ法）には分層できなかった。そこで上杉・米澤氏らに依頼してテフラ層を Y-№で分層してもらい、遺物出土層の堆積年代値を知ることができた。Y-№とは、上杉氏らは富士系テフラの模式地である静岡県駿東郡駿河小山町一帯のテフラ層序をもとに、富士系スコリアや岩片の諸特徴、挟在する箱根系その他のパミスやガラス片を根拠にして、一枚一枚のテフラ層に番号を付けてテフラのカタログを作っていた（関東第四紀研究会 1987）。その成果として、武蔵野ローム下部の Y-1(御岳 Pm-1 層準: 約 9～10 万年前）から立川ローム最上部の Y-141 まで（約 1 万年前）の 141 枚のテフラに Y-№を付け、立川ローム層よりも上位の縄文時代以後に堆積した黒土（完新世テフラ）に S-№（S-0～S-25）を付けた（最新の文献は上杉陽編著 2003）。ちなみに、Y-№の Y は新期ローム層（Younger Loam）の Y、S-№の S は模式地である須走の S で、S-25 が宝永スコリア層にあたる。

富士系テフラの分布範囲

1990 年代から第二東名、慶応 SFC、吉岡遺跡群、青野原バイパス関連遺跡群、用田バイパス関連遺跡群と次々に大規模な旧石器遺跡が調査されるたびにテフラ層のデータが蓄積された。その後、考古学と火山灰層序学を結ぶ研究成果として、富士山から 70km 以内の神奈川県各地の遺跡の分層マニュアルおよび遺跡層序との対比案（上本 2004）ができた。

大和市神明若宮遺跡



富士山のテフラは南関東上空の偏西風の影響を受けて山頂の真東よりもやや北（約 12～15°）に偏って最も厚く堆積している。遺跡の土層を Y№と S№で分層できる範囲は、富士山頂から 60km 以内であれば富士山の真東から約 57°北～45°南の範囲内であり、富士山頂から約 120km 以内であれば富士山の真東から約 25°北から 10°南の範囲内である。この

範囲内には大宮台地南部や房総半島市原・君津地域が含まれており、伊豆系テフラや北関東系テフラとの対比が可能な地域を含んでいる。これほど広い範囲の遺跡が同じ火山のテフラ層内にあるということで、100㎞ 離れていても同じ Y-№のテフラ層から出土した遺物は同じ時代の遺物ということになる。その際にあくまでも基準となるのは相模野台地の標識的なテフラ柱状図である。

相模野台地の標識的テフラ柱状図（大和市神明若宮遺跡）　2 頁右図参照

大和市神明若宮遺跡は大和市南部の引地川右岸にあって、富士山頂から約 65km、富士山の真東から約 11°北にずれた位置にある。立川ローム層全層が良好な堆積状態で観察できた模式的な遺跡である。遺跡が立地する地形は Y-103（相模野第２スコリア:約 3.5 万年前）降下期からテフラが堆積する環境になった立川段丘面上にある。

（参考文献）

上杉　陽編著（2003）地学見学案内書「富士山」．日本地質学会関東支部発行，117p

上本進二・上杉　陽・米澤　宏・由井将雄・中村喜代重（1994）南関東の立川ローム層と考古学土層．神奈川考古，30，p159-175

上本進二・上杉　陽（1996）神奈川県のテフラ層と遺跡層序－考古学のための Y-№・S-№分層マニュアル－．関東の四紀 20，p3-24

上本進二（2004）「神奈川県のテフラと遺跡層序」．『用田南原遺跡』，p537-560.かながわ考古学財団調査報告書 168，財団法人　かながわ考古学財団，576p

関東第四紀研究会（1987）大磯丘陵の層序と構造．関東の四紀，13，p3-46

関東ローム研究グループ（1965）関東ローム－その性状と起源－．築地書館，378p

米澤　宏・上杉　陽（1990）宮ヶ瀬遺跡群周辺のテフラと地形．『宮ヶ瀬遺跡群Ⅰ』．p226-241

平成 21 年度考古学講座結果報告
～かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る～

去る平成 22 年 3 月 7 日（日）に平成 21 年度考古学講座「かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る」が横浜市歴史博物館講堂で開催され、約 130 人の参加を得ました。安蒜政雄先生（明治大学教授）には基調講演をいただき、全国的な視野から研究の現状と課題についてご紹介していただきました。講座はテーマに沿った発表とそれに対するコメント形式で行われ、より深化したわかりやすい内容で発表していただきました。最後に白石浩之先生（愛知学院大学教授）より講評をいただき、今後の研究の展望が述べられました。

基調講演する安蒜先生

講座会場風景

「第 33 回神奈川県遺跡調査・研究発表会」に参加して

五十嵐　睦

はじめに

今年度平塚市への着任を機に、今回初めて神奈川県考古学会遺跡発表会に参加させていただきました。

今回の小特集は､「神奈川の歴史を守る - 保存目的の調査 - 」ということで、県内 4 遺跡について取り上げられ、各調査担当者の方々から発表がありました。また、今年度の調査成果について 4 遺跡の報告がありました。

保存目的の調査

これまで、博物館で勤務していたため、遺跡をはじめ考古資料の「活用」を意識しながら仕事をしてきましたが、今回は表裏一体の概念である「保存」について改めて考える機会となりました。今後、私自身「保存目的の調査」を行う機会もあると思いますが、その際にどのような姿勢、考え方、方法論をもって臨むべきなのか、そうした観点で各発表を拝聴しました。

小特集で取り上げられた｢保存目的の調査｣は、各遺跡により経緯も採用された調査方法も一様ではありませんでした。調査の具体的な内容は発表要旨に詳しいので、ここでは各遺跡の調査経緯と調査方法についてまとめてみたいと思います。

綾瀬市神崎遺跡は、過去の調査でその重要性が明らかになっている弥生時代後期の環濠集落で､2009 年国指定史跡指定に向け必要となった遺跡の再評価を目的に行われた調査とのことでした。担当者の井上氏（綾瀬市教委）は､「環濠内南半部と環濠外部の遺構の確認」を調査の目的とし、発掘調査を最小限に抑えること意識したと強調されていました。掘削は遺構確認面までで、住居跡などの遺構はプランのみを確認するに止め、柱穴や土坑は半截までで完掘はしなかったとのことでした。住居跡の平面形態や包含層出土遺物から東海地方からの影響が推定されるとのこと。どのような情報をどの程度まで得、一方で掘削をどこで止め遺跡をどのように保存するか、その十分な検討と判断が必要であることを感じました。

鎌倉市大町釈迦堂口遺跡は、地理的歴史的に重要である可能性が高いにも関わらず、考古学的には調査がほとんど行われておらず、2008 年に確認調査および周辺のやぐら群の分布・測量調査を行ったとの事でした。この調査では、13 世紀末～15 世紀以降の各時期の土地利用の変遷と非日常的な土地利用のあり方が明らかにされました。

山北町河村城跡は、史跡整備に関わり行われている調査が取り上げられ、検出された堀障子などが紹介されました。河村城跡の調査成果は、史跡整備計画に生かされていくとのことです。神崎遺跡同様、保存・活用に向けた成果が求められており、調査区の設定や調査の方法などを十分に検討する必要性があることがわかりました。

横浜市日吉台地下壕については、慶應義塾大学の日吉キャンパスに位置する遺跡で、体育館の建設に伴い調査が行われたとのことでした。文化庁、神奈川県、横浜市を交え、地下壕の保護措置について議論され、調査に至ったということでしたが、横浜市ではアジア太平洋戦争時の遺跡が文化財として扱われていないということで、慶應義塾大学の自主的な環境調査として実施されたとのお話でした。日吉台地下壕は、神崎遺跡や河村城跡のような保存目的の調査とは異なり、戦争遺跡の保護措置について考えさせられる事例だったかと思います。今後、こうした性格の遺跡が破壊されてしまう場面になった際に、どのように協議を行い、どのような方向性をとっていけばいいのか、日吉台地下壕のような事例を精査し、参考にすべきだと思いました。

以上 4 遺跡の「保存目的の調査」をみてきました。これまで未調査だった地域を確認調査

によって内容の一部を明らかにし、その重要性を認識し、今後の保存につなげていく目的をもった大町釈迦堂口遺跡例。史跡指定の方向性をとる中で、遺跡内容の再認識をすることを目的とした神崎遺跡例。史跡整備中で、遺跡内容の把握とその成果を整備計画に結びつけることを目的とした河村城跡例。体育館建設に伴う調査ではありましたが、事前の検討により体育館建設位置を変更、地形・景観の保存に結びついた日吉台地下壕例。いずれも多様な目的があり、その目的に応じてどのような調査を行うべきかが協議・検討されている状況がわかりました。

今回の遺跡調査･研究発表会の開会に際し、副会長である中村若枝氏が千葉県飛ノ台貝塚の保存を例に、保存活動のときに最も大きな力になるのは地域の方々だ、というお話をされました。今回の発表のうち特に史跡整備に関しては、今後地域の方々を中心に利用が開始され、保存や活用のあり方が注目されるかと思います。私自身、以前群馬県北群馬郡榛東村に臨時職員としてお世話になっていた際、国指定史跡茅野遺跡の史跡公園開園に立ち会わせていただいたことがあり、地域の方々の理解と、地域の方々にどのように遺跡と関わってもらえるかの重要性を感じました。

先述のように、これまで博物館に勤めてきましたが、博物館はこうした遺跡に対する理解や関わり方を促す役割を担っていると思います。地域の歴史・文化について、誰に何をどのように伝えるかということを意識する必要性があるかと思います。そうして得られた地域の理解は、遺跡を保存していく上で非常に大きな力になるのではないか、開会にあたっての中村氏のお話をこのような想いで聞いていました。

調査・研究発表

小特集に続き、近年の調査について 4 遺跡が取り上げられ発表がありました。どれも興味深い報告でしたが、伊勢原市西富岡・向畑遺跡の「帯状粘土列」については、粘土を他所から持ち込み、帯状に敷いており、特に被熱痕跡等も見られないということで、性格は不明とのことですが、類例や周囲の状況も含め注目していきたいと思いました。

紙面の都合で全ての遺跡についての感想は割愛させていただきますが、最後に発表方法という観点から横浜市神奈川台場を調査された山田光洋氏（横浜市ふるさと歴史財団　埋蔵文化財センター）の発表について感想を記したいと思います。

この調査は、神奈川台場の遺構の一部を含む神奈川台場公園において行われたもので、神奈川台場の保存活用に資することを目的するものとのことでした。「西取渡り道」の範囲・状態を確認することが主要目的ということでしたが、掘削面積が制限されていたということで、的を絞った調査を行う必要があったとのお話でした。調査成果は発表要旨に詳しいので省きますが、第 1 次調査では明らかになった部分はあったものの依然不明な点が多かったとのこと。第 2 次調査においては第 1 次調査の成果を基にトレンチを臨機応変に形状・数を変更できるよう設定しながら調査を行い、西取渡り道の残存状況や内部構造を把握するに至ったということでした。第 1 次調査での調査方法と成果、わかったことわからなかったことを明示し、そこから仮説を立て､順次トレンチを設定し第 2 次調査を行い、その都度仮説を立て直しながら、最終的に目的を達するまでをわかりやすく順序だてて説明されていました。発表時間や紙面の都合がある中で、こうした発表を聞くことができ、調査の方法とともに今後の参考にしたいと思いました。

おわりに

以上、保存目的の調査について、また近年の調査成果について興味深い発表を聞くことができました。また、最後に記したように調査方法だけでなく、わかりやすくかつ印象に残る発表方法についても刺激を受けました。

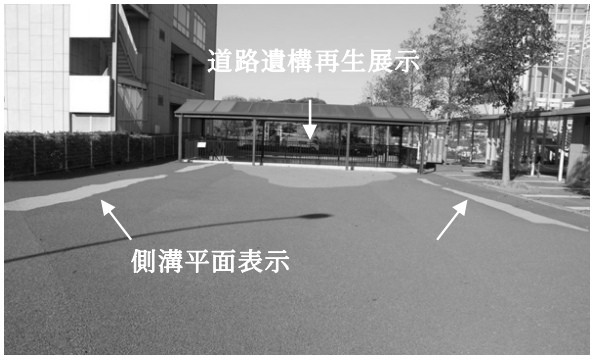
武蔵国分寺見学会に参加して

村田　和香奈

2009 年 11 月 21 日（土）に、東京都国分寺市の武蔵国分寺見学会に参加させていただきました。神奈川からは比較的近く、行きやすいところではありますが、近いと思うとなかなか足を運ばないもので（反省です）、今回とてもいい機会になりました。

当日は雲ひとつない晴天で、見学会に適した散策日和でした。黄金色の落ち葉を踏みしめながら、ひたすら歩く。

駅を抜けはじめに見えたのは、古代の幹線道路である東山道遺構の再生展示です。旧東山道の遺構の位置と範囲が歩道に色分けされて整備してあり、新旧入り混じった不思議な光景でした。



東山道武蔵道の側溝平面表示

資料館に向かう途中印象的だったのが、消防署の入り口の看板にまで軒瓦と平瓦のレリーフがあったことでした。国分寺の瓦の浸透具合にびっくりです。

元町用水脇のお鷹の道を通り、武蔵国分寺資料館へ。ちょうど「住田古瓦コレクションの世界～瓦に魅せられて～」が開催されており、北は陸奥国から南は薩摩国の瓦まで、全国の資料を拝見させていただく貴重な機会となりました。故・住田正一氏は海事史・法制史学者として知られ、東京都副知事など大役を歴任されながら、古瓦研究者としても活躍された方のようです。蒐集された膨大な瓦と、それをもとにして執筆された文献を見て、住田氏の古瓦への情熱にただただ圧倒されるばかりでした。

次に向かったのは、武蔵国分僧寺跡の発掘調査現場でした。現在講堂が検出されているようですが、当日は調査がお休みだったので全景を見ることはかないませんでした。しかし、調査区の大きさや雰囲気をうかがい知ることができました。

中学校に付設されている資料館を見学した後は、武蔵国分尼寺跡へ。尼寺跡に向かうまでの道にも、地面にぱらぱらと瓦片が落ちていました。

国分尼寺跡は現在歴史公園になっており、板塀が復元されているほか、金堂跡の版築がガラス越しに見られるようになっていました。幾重にも積み重なり、しっかりと基壇を形作っている古代の技術に感動しました。

史跡公園では、金堂の上で子どもたちがおはなしをしていたり、公園部分でサッカーをしていたり、お母さんと一緒に礎石の区画に沿ってよちよち歩いている子がいたりと、のどかで楽しい風景が広がっていました。国分寺の市民に愛されているのだと感じました。子どもたちが大きくなって国分寺のまちを思い出すときに、そこに史跡の風景が広がっていればいいなと思います。

瓦づくしの１日で、楽しかったです。また機会がありましたら参加させていただきたいです。ありがとうございました。

武蔵国分尼寺の復元基壇

津久井城を知ってもらうために

野口　浩史

私、幸せなことに、遺跡のもとで仕事をさせていただいています。津久井城は「かながわのチベット」とも評される（？）相模原市津久井町と城山町にまたがって聳える独立峰「城山」として親しまれる、関東でも屈指の山城です。史跡指定こそ受けていないものの、現地表でも確認できる曲輪（くるわ）や切岸（きりぎし）、竪堀（たてぼり）などは、まさに遺跡の中にいることを日常的に体感させてくれます。

津久井城は戦国時代から江戸時代にかけての時期が主体となる遺跡ですが、遺跡自体について、ここで詳しく語ることは、やめておきましょう。なぜなら、これを読んだみなさんに、遊びに来てもらいたいからです。津久井城では、遺跡に来て、触れてもらうための取り組みが徐々に進められており、私もその一環を担わせていただいています。

津久井城は、独立峰「城山」をほとんど包括するかたちで「県立津久井湖城山公園」として整備が進められています。平成５年に都市計画決定されてのち、開園区域が徐々に広がり、平成 18 年には「根小屋地区」と呼ばれる南麓にパークセンターという公園の管理運営の中核をなす施設が出来上がりました。施設には展示室、研修棟が付属して、常設・企画展示や団体向けのレクチャーができるようになっています。

津久井城

公園と、遺跡。全国に歴史公園は多々あります。中世の城郭が公園になっている例も多く、行政ががんばって復元をはじめとした整備をかけている公園も少なくありません。ですが、整備した後はどうなっているのでしょう。広大な公園は、管理するのがとてもたいへんなのです。草がぼうぼうと生えてきて曲輪などの形状が見えづらくなったりしているところもあるのではないでしょうか。

遺跡の保存・保全に関しては、いろいろな考え方があるでしょう。草がぼうぼうになっても、人間が土地をいじらなければ遺跡は保全されるわけです。ですが、津久井城に関しては公園化が決定したときから今までの間にさまざまな議論が交わされ、津久井城をなるべく多くの人に知ってもらい、体感して楽しんでもらう公園にしようと整備がすすめられてきました。

私たちは公園のスタッフとして、園内の草刈りや木々の剪定、花の植え付けなどの管理作業を行っていますが、それと並行して津久井城をどうやったらみんなに知ってもらい、楽しんでもらえるかを同時に考えています。遺跡を楽しんでもらうにしても、かかわり方には段階があります。お城ファンや歴史ファンの方には、来てもらえれば楽しんでいただけるように展示やフィールドの看板を作り、イベントを打っています。ですが、公園の利用者は、当然それだけではありません。日々の散歩をする人や花・小鳥を愛でに来る人、子どもを遊ばせるお母さんに向けていきなり「発掘調査見学会」や「津久井城歴史ガイド」を企画しても、大半は尻ごみしてしまうでしょう。そこで、具体的には、野に咲く花の解説のなかに歴史の話を織り交ぜたり、子ども向けの遊びのなかにお城や武者を登場させたりするわけです。少しずつ情報を入れることによって脳細胞に「津久井城菌(？)」を送りこんでいきます。送りこまれた人たちには、

何かの折に「そういえば遊んでいたあの公園、津久井城ってお城だったんだよね」「お城って天守閣ばかりじゃないんだって、津久井城で聞いたことがあるよ！」と思いだしてもらえれば、いいのかなと思っています。そこから歴史への興味が湧き出すということも、あると考えます。

少し話は変わりますが、対人で解説するときの手法として「インタープリテーション」という言葉があります。直訳すると「通訳」ですが、環境教育のなかでは「自然・文化・歴史（遺産）をわかりやすく人々に伝えること。知識そのものを伝えるだけではなく、その裏側にある“メッセージ”を伝える行為、あるいはその技能」として、用語が使われています。これは、環境教育だけにとどめておくには、もったいない手法です。歴史教育でも、応用する価値があるものと思っています。なぜなら、インタープリテーションの目的が、場所が限定されるのなら「その場所を大切にする人を育てること」であり、行政機関向けには「一般の人たちが保存・管理活動に参加するよう奨励すること」なのだから。

公園というのは、当然ですが場所が固定されています。これは、地元と密着した存在であるということです。遺跡も、然り。私は、地元の多くの方々に、津久井城のそばに住んでいることを誇りに思ってもらいたいと願っています。それには、まず多くの人たちに津久井城というものを知ってもらわねばなりません。小鳥を愛でるナチュラリストに、公園で遊ぶお母さんと子どもに向けて、少しでも分かりやすく、より楽しく歴史を伝えていきたいと思っています。私はまだ、歴史を解説するときに、ひとりよがりになりがちです。研究者や歴史ファンにしか知らない専門用語も、使わざるを得ないときがあります。が、相手の身の丈に合った解説を、インタープリテーションの技法も用いながら進めていければ、津久井城ファンが少しでも増えてくれるのではないかと、目論んでいます。

平成22年度総会のご案内

平成 22 年度の総会を下記のとおり開催する予定です。アンケート結果に基づく 20 周年記念事業の具体案のご提示などを予定しています。

○日程　平成 22 年 5 月 8 日（土）

○場所　神奈川県埋蔵文化財センター
　　3 階　研修室

なお、開催時間や議事等詳細が決まりましたら、正式にご案内いたします。

「考古かながわ」原稿大募集！

年に 2 回発行される、この小冊子「考古かながわ」に、原稿をお寄せください。遺跡について、遺物について、昨今の神奈川の考古事情で思うことなど、なんでも構いません。お待ちしています！

神奈川県考古学会ホームページのご紹介

当会はホームページ「web 版考古かながわ」を開設しています。当会に関する基本情報のほか、情報掲示板やこれまでの「考古かながわ」紙面も見られます。ぜひ一度ご覧ください。また、Web 上で「こんな企画を閲覧したい！」などご希望がございましたら、どしどしお寄せください。

考古かながわ　第 43 号
発　行　神奈川県考古学会
発行日　2010 年 3 月 31 日
編　集　中川真人･野口浩史･若林勝司（連絡誌担当）
印　刷　(有)湘南グッド
発行者　神奈川県考古学会　会長 岡本孝之
〒252-8520　藤沢市遠藤 5322
慶應大学　岡本孝之研究室　気付
郵便振替　00240-9-71208
e-mail　soumu@koukokanagawa.net
U R L　http://www.koukokanagawa.net